



解剖学第二講座（教室だより）

三木, 明德

(Citation)

神戸大学医学部神緑会学術誌, 2:105-106

(Issue Date)

1986-06

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81007031>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81007031>



教室だより——

解剖学第二講座

私達の教室が産声を上げてもはや30年になる。神戸大学医学部の歴史を繙いてみると、解剖学第二講座は昭和30年4月1日に開講されたと記されている。昭和31年4月、岡本道雄先生（現神戸市立中央市民病院々長、臨時教育審議会々長）が初代教授として着任、翌年米国に留学された。昭和33年4月、溝口史郎先生が京大より助教授として着任、間もなく岡本教授も帰国されて講座としての体制が整った。そして、岡本教授が米国より持ち帰られた中枢神経の組織培養と、オリブ核を中心とした錐体外路系の線維連絡に関する研究が始まった。岡本教授は昭和35年、京大教授として転出されたが、中枢神経の組織培養や錐体外路系の研究は溝口助教授を中心にしてその後も続けられた。また腕神経叢の比較解剖学的研究も併行して行われていた。その当時教室のスタッフとして研究に携っておられた諸先生方は、現在臨床の各方面で活躍されている。昭和43年、ドイツに留学中の溝口

助教授は教授に昇任され、長い教授不在の時代は終わった。昭和49年、瀬口春道助手（現高知医科大教授、40年卒）がスイス留学を終えて帰国、助教授に昇任されたが、昭和51年、京大助教授として転出された。その後昭和60年、三木明德講師（52年卒）がドイツ留学を終えて帰国し、助教授に昇任して現在に至っている。

教育面では、開講以来当教室は組織学および発生学を担当している。組織学を担当する教室にとって、実習標本の整備は一つの重要な課題であるが、これは大変な仕事である。現在ではどこに出しても恥かしくない、充実した組織標本になっているが、これは、「組織学における最大かつ最良の教師は適切に作られた標本である」という溝口教授の信念と、教育に対する熱意のたまものである。私も学生時代に、「これは天下一品の標本です」という言葉を何度も耳にしたが、この天下一品の標本の数々は、講座開講以来ひたすら標本の作製に尽してきた

菊井悠允技官の努力の結晶であることも決して忘れてはならない。

現在のスタッフは溝口史郎教授（京大24年卒）以下、三木明德助教授（52年卒）、藤本悦子助手（神戸女子薬大、51年卒）、溝口明助手（55年卒）、菊井悠允技官、吉田一子技官の計6名。他に臨床講座より派遣された主科目分担の大学院生や研究生数名を加え、小世帯ながらも活発に研究活動を行っている。溝口教授は、これまでの学研生活の総まとめとして一昨年来「図説組織学」を出版されたが、本書は組織学アトラスとして、その実例の豊富さと写真の美しさにより高い評価を受けている。現在は、これまで長年にわたって収集してきたヒト胎児の写真集を、発生学アトラスとして出版すべく、精力的に活動されている。三木助教授は教室入局以来、種々の組織化学の技術導入に努め、それらを使って神経細胞や筋細胞の発生分化に関する研究を行ってきた。最近ではラットの全胎仔培養法を用いて、組織発生や細胞分化あるいは奇形発生のメカニズムに関する研究を行っている。本研究には間もなく臨床講座から2～3名の大学院生や研究生の参加が予定されており、その成果が期待されている。またこれと併行して、卵黄嚢上皮におけるエンドサイトーシスと、これに伴う物質の細胞内輸送や膜リサイクリングに関する超微形態学的研究も行っている。藤本助手はここ数年、同じく組織細胞化学的に、中枢神経や網膜におけるミクログリアの発生分化に関する研究に取り組んでいる。ミクログリアは古くから知られた細胞でありながら、その機能や由来については依然として謎に包まれており、興味深い細胞である。溝口助手

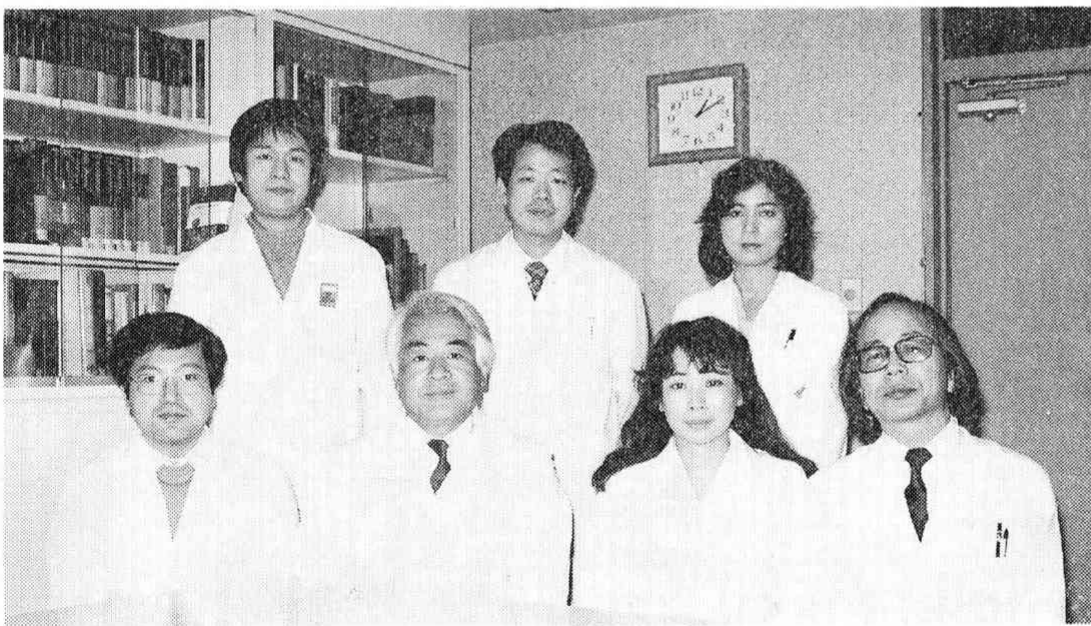
は大学院時代には、第一生化学教室において血球の分化に伴う細胞表面の糖鎖構造の変化に関する研究を行ってきた。一昨年来当教室のスタッフの一員となり、現在では第一生化学教室と共同でモノクローナル抗体産生細胞の株化樹立をめざして奮闘中である。この他、当教室で進められている研究としては、整形外科より派遣された中野圭一郎大学院生（59年卒）によるラットの膝関節側副靭帯における知覚神経終末の分布およびその微細構造に関するもの、研究生2名による、着床および胎盤形成に関する組織化学的研究などがある。

組織学や発生学の講義は主として溝口教授が担当されているが、組織学習面は全スタッフが総力を上げて行っている。日常の活動は当然のことながら実験やその結果の整理・検討あるいは文献調べなどが中心となる。我々の教室では、一人一人がそれぞれ別の研究テーマを持っており、各人が立てた実験計画に基づいて実験を行っている。しかしお互いが他人の研究に無関係、無関心というのでは決してなく、毎月曜日の午後には全スタッフが集まって抄読会が開かれる。そこではそれぞれの研究に関する最近の知見や傾向を紹介し、活発な意見の交換が行われている。実験検討会は特に日時は決めておらず、必要に応じて頻回に行われている。それが勤務時間を過ぎていれば（下線部は重要!）、アルコールなどで胃腸“消毒会”を伴うこともある。

以上が解剖学第二講座の歴史と現況である。

昭和61年3月

〈文責・三木明德〉



写真・昭和61年2月21日、第二解剖図書室において撮影。
前列左より、三木助教授、溝口教授、藤本助手、菊井技官、後列左より、溝口助手、中野大学院生、吉田技官